

おくることば

周 郷 博

ことば。

「太初はしめにことばがあった……」というヨハネ福音書の「ことば」そのような特別な例を引き合いに出さなくとも、ついこの間までの日本においてだって、この「ことば」は生きている——命のあるものだったし、昔に、古代にさかのばればさかのぼるほど、「ことば」は「神聖な」真実な、それがなくてはわが人生は意味をもたぬ、という、それほどに大切、必須なものであった。「ことば」が、いたずらにうるさい、騒音の一種、無分別な自己宣伝の具になってしまい、一時しのぎのいい抜け、おべんちゃら、欲望や物欲の取引の具になってしまったことは、かつてこれほどであったことはない。

こんな時代に——いま、幼稚園の年齢を過ぎて小学校へはいり子どもたちに、どんなことばを「送る」(Communicateとあえて言おう)ことができるか。

私は、イギリスが、第二次大戦中にすでに教育の大胆な改革の構想をもっていて、それがバトラフ法というものになって一

九四四年に成立した。そのあと、イギリスの王室出版所(教育のことは王室出版所 Her Majesty's office から出される)から出されたパンフレット——そのいちばん最後のしめくりに「イエスは自ら言ったことを実行して十字架にかけられた。わたしたちも、またそのようにここに言われたことを自ら実行して責任を最後までとる」と書かれていた。私は、このことを深く心に刻みつけている。じっさい、イエスの十字架、それはその言ったすべての「ことば」を身をもって「実行した」。私は足のつま先から頭まで身ぐるみ震動してゆらぐを感じる。

私たちは、戦後何をしてきたのか。私たちが発した(?)「ことば」は何であったのか。その「ことば」について、私たちはどんな責任をとっているのか。

一九七一年の春、この幼稚園を終えて学校へ子どもたちが行った。これは、私のぎりぎりの誠意。それより他に言いようもなかった。私はこの「ことば」をけっして忘れまい。

ここで幼い日をすごした……二年いた子も、三年いた子もいるけれど、どの子にとつても、もう二度とない、だいじなだいじな幼年時代でした。

君たちは、小学校へはいる。だんだん、からだも大きくなり、心も、何かはりのある、ひきしまったすがたにそだっていくだろう。よい友だちともめぐり合い、ものごとの見かたも成長して、仰ぎ見る、まぶしいような青年になり、お嬢さんになる日が来るだろう。そのときの日本は、世界はどんな国に、世界になつていてしょうか？

この世の中に、変らないものは一つもない。君たちが、よく変つて“成長してゆくことを、変つてゆく日本と世界にとつて大切な人になつてゆくことを、私はこの春の日に、祈らないではいられない。

幼年時代を忘れてもいい。けれど、それは“地下水”のように君たちの生涯を絶えず、うるおす”ものであることを願う。